

アジア育成年代サッカーの実態調査
～ベトナム・ハノイ地域日系サッカークラブに着目して～

松山 博明 上田 滋夢 上林 功 松井 健
馬込 卓弥 辰本 頼弘 巽 樹理

Survey on Current Asian Youth Soccer
— Focusing on Japanese Soccer clubs in Hanoi, Vietnam —

Hiroaki MATSUYAMA, Jim UEDA, Isao UEBAYASHI, Takeshi MATSUI
Takuya MAGOME, Yoshihiro TATSUMOTO, Juri TATSUMI

アジア育成年代サッカーの実態調査 ～ベトナム・ハノイ地域日系サッカークラブに着目して～

松山 博明¹⁾ 上田 滋夢¹⁾ 上林 功¹⁾ 松井 健¹⁾
馬込 卓弥¹⁾ 辰本 頼弘¹⁾ 巽 樹理¹⁾
(追手門学院大学)

Survey on Current Asian Youth Soccer — Focusing on Japanese Soccer clubs in Hanoi, Vietnam —

Hiroaki MATSUYAMA, Jim UEDA, Isao UEBAYASHI, Takeshi MATSUI
Takuya MAGOME, Yoshihiro TATSUMOTO, Juri TATSUMI

要 約

本研究では、ベトナムサッカーに寄与した日本人サッカー指導者が設立したクラブの育成年代サッカー選手が、サッカーに対する志向や目標などを探索する基礎的研究を実施することが目的である。その結果、以下の内容が得られた。

サッカーを始めた動機に関しては、73.0%以上が「楽しそう」だからという内発的動機付けによってサッカーを始めたと考えられる。チーム以外での練習回数に関しては、81.0%以上が「ほとんどしていない」ことがわかった。練習の楽しさに関しては、89.0%以上が「いつも楽しい」と回答している。サッカーでの目標に関しては、上のレベルを目指したいという競技スポーツとしての選手と楽しくスポーツを実施したい生涯スポーツとしての選手で2極化した結果になった。サッカーの観戦に関しては、合計すると84.2%がサッカー観戦をTVで行っているほど関心度が高いことが分かった。練習回数や時間に関しては、日本サッカー協会（以下：JFAとする）の指導指針に沿った練習回数をこなしていることがわかった。

以上のことから、ベトナムサッカークラブの育成年代選手は、サッカーに対する興味があり、志向や目標などが明確であった。年代に適した練習量でサッカーを楽しみながら実践していることが明らかになった。今後、スポーツ開発計画のみならず日本人サッカー指導者が設立したクラブなどによって、ベトナムサッカーが世界レベルへと発展していくと考えられる。

I. はじめに

ベトナムにおけるスポーツは、文化・スポーツ・観光省が管轄している。スポーツに関連する文化・スポーツ観光省の主な実施事業は、フィットネススポーツと高度スポーツ・プロスポーツの2つに事業を分類することができる（独立行政法人日本スポーツ振興センター、2017）。スポーツ担当の役割については「生涯スポーツ」「高度プロフェッショナルスポーツ」の発展に分類される。「高度プロフェッショナルスポーツ」では、国内で国際大会を開催するための誘致活動スポーツに関する専門的な科学知識の収集・教育、選手・コーチ・審判のための制度改革・規制の実施、各世界選手権大会等への選手派遣許可、全国青少年スポーツ大会の実施、ナショナルチームの強化・移動や生活の支援、選手・コーチ・審判の研修プログラムの作成・実施、プロスポーツ施設の認可等を行う活動を行っている（独立行政法人日本スポーツ振興センター、2017）。また、2030年スポーツ開発方法の基本計画では、ベトナムは、強みとするスポーツについては世界・地域の競争の水準に到達し、2030年までにアジアにおけるスポーツ国家となると述べられている。特にサッカーにおいては、プロスポーツに発展させること、地域の主要サッカー拠点を発展させること、2030年までにアジアにおいてベトナムが最もサッカーの上位国10ヶ国の仲間入りを果たすこと等が示されている。こうしたスポーツ開発計画においてトップダウンで行われているナショナルチームの強化については着々と成果が出始めている。韓国人指揮官のパク・ハンソ監督がベトナムサッカー連盟（以下：VFFとする）との間で、ベトナムA代表・U-23代表監督に関する契約を結んだ。2019年、男子ベトナムA代表がUAEで開催されたAFCアジアカップでは、ベトナム代表がベスト8進出の快挙を達成した。ベトナムは、東南アジア4か国共同開催（インドネシア、マレーシア、タイ、ベトナム）となった2007年大会以来となる12年ぶりの出場で、見事にグループリーグを突破した。決勝トーナメント1回戦でPK戦の末にヨルダンを下してベスト8進出し、準々決勝では、強豪日本に敗れたものの、その差は僅かに1点であった（ベトナム総合情報サイトVIETJO、online）。

また、それ以外の計画の中で、育成環境を整えるボトムアップの視点からも、地域及び学校におけるサッカーの促進・新規トレーニングセンターの整備、サッカーへの民間投資の促進によるサッカー選手の開拓や選手育成のための国家予算の増額などを実施している（独立行政法人日本スポーツ振興センター、2017）。こうした国内外で実施されている、サッカー競技力向上施策の中で民間投資の促進によるサッカー選手の開拓や選手育成は、ベトナムのダナンに支社を持つ日系企業の、「海外でスポーツビジネスを展開したい」という考えとマッチした。そのプロジェクトの中心人物である井上寛太氏（各世代別日本代表／元プロサッカー選手）（以下：井上氏とする）は、ベトナムは今後の経済発展も進みそうであり、サッカーも強くなっているのとて興味深いと考え、ベトナムで総合スポーツアカデミーを運営、スポーツを通して日本の教育を伝えるべく日々奮闘している（海外就職のBEYOND THE BORDER、online）。2017年8月に

スクールが開校し、現在のスクール生の数は約130名程度在籍している。子供向けだと下は3歳から大人向けのクラスまである、40歳の人也在籍している。井上氏は、「ベトナムの子供たちは、かなり自由な印象で、自分のやりたいようにやるという子供が多い。そこをしっかりと指導していくことだが、縛りすぎても、個性がなくなるので、気を付けながら指導している。」と述べている。また、将来的なビジョンとして、井上氏によると「指導方法をベトナム全国に広めて、出来るだけ多くの子供に届けたい。将来的には、現在のスクールの活動からアカデミー設立に繋げていって、プロサッカー選手を育てるのが目標である。」と述べている（Golaco [ゴラッソ] 大人のサッカーまとめ、online）。

しかし実際、2030年に向けたスポーツ開発方法の基本計画の中でボトムアップがどのように行われているのか、また、クラブとしての目標や指導方法がどのように影響し、育成年代の選手にとって育まれているのかは、これらはこれまで調査したことの無い実態であり、未知数である。したがって、こうしたベトナムサッカーに寄与した日本人サッカー指導者が設立したクラブの育成年代サッカー選手が、サッカーに対する志向や目標などを探索する基礎的研究を実施することが目的である。

2. 研究方法

2. 1. 調査内容

研究者本人がベトナム・ハノイ市に出向き、ルーヴェン・フットボールスクールのスタッフに調査の目的などを簡潔に説明し、アンケート調査を行った。

2. 2. 調査項目

松山ら（2020）の「ブータンサッカーの育成年代の競技力向上に関する実態調査尺度」を基に質問紙7項目を設定した。各質問項目の内容及び回答は以下の通りである。

(1) サッカーを始めた動機

- ①両親にすすめられて ②先生やコーチにすすめられて ③兄弟や友達がしていたから
④サッカーが楽しそうだから ⑤サッカー選手達がかっこいいから

(2) チーム以外での練習回数（1週間）

- ①いつもよくしている ②よくしている ③ときどきしている ④あまりしない。

(3) 練習の楽しさ

- ①いつも楽しい ②楽しくないときもある ③ときどき、楽しい ④あまり楽しくない。

(4) サッカーにおける目標

- ①海外のプロサッカー選手になること ②国内クラブのサッカー選手になること ③リーグ戦トーナメントで優勝すること ④チームでレギュラーになること ⑤友達と仲良くサッ

カーができればいい ⑥その他)。

(5) サッカーの観戦

(①よく競技場へ見に行く ②テレビの試合はよく見る ③ときどきテレビの試合を見る ④ほとんど見ない)。

(6) 練習回数について (回/週)

(①1回 ②2回 ③3回 ④4回 ⑤5回 ⑥6回 ⑦7回)。

(7) 練習時間について (1回の練習時間)

(①30分 ②45分 ③1時間 ④1時間15分 ⑤1時間30分 ⑥1時間45分 ⑦2時間以上)

2. 3. 調査対象

平均8.8歳 (5~15歳) の育成年代男子選手の合計38名であった。

2. 4. 調査期間

2019年8月16日の1日間実施した。

2. 5. 統計処理

全ての統計にはIBM SPSS Statistics 21を使用し、記述統計の度数分布を行った。

3. 結果

3. 1. サッカーを始めた動機

サッカーを始めた動機に関する結果を図1に示した。

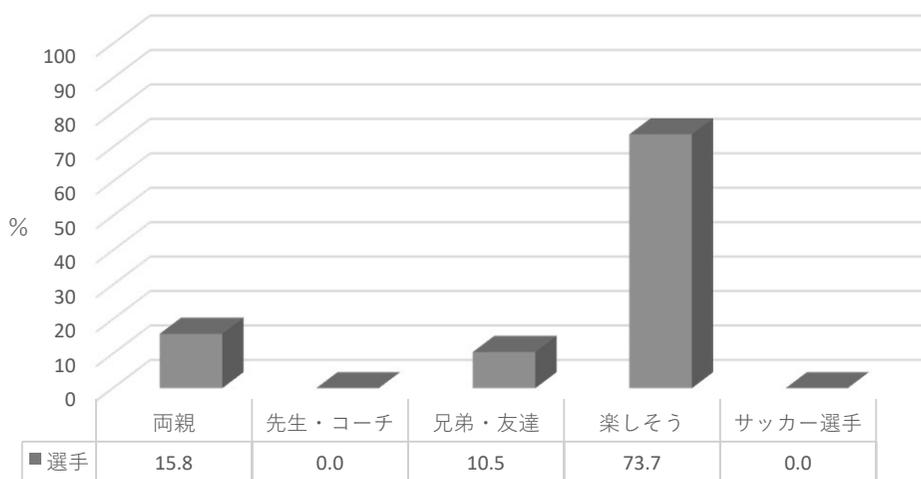


図1. サッカーを始めた動機

3. 2. チーム以外での練習回数

チーム以外での練習回数に関する結果を図2に示した。

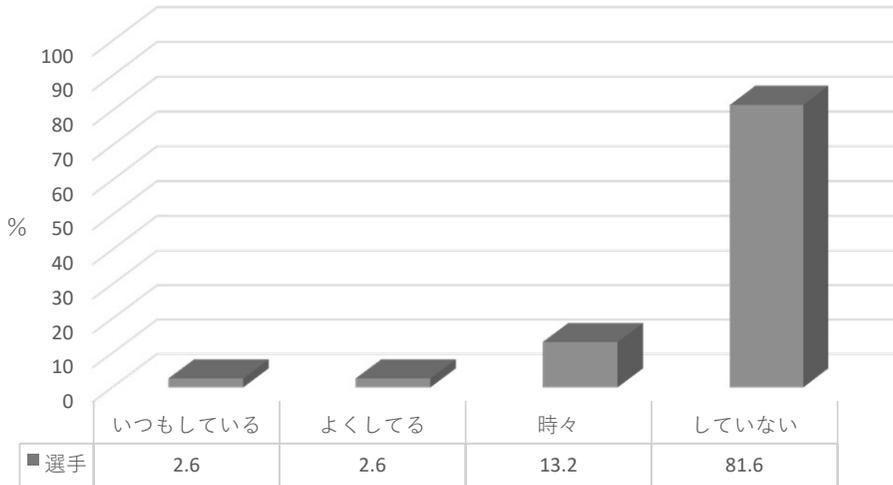


図2. チーム以外での練習回数（1週間）

3. 3. 練習の楽しさ

練習の楽しさに関する結果を図3に示した。

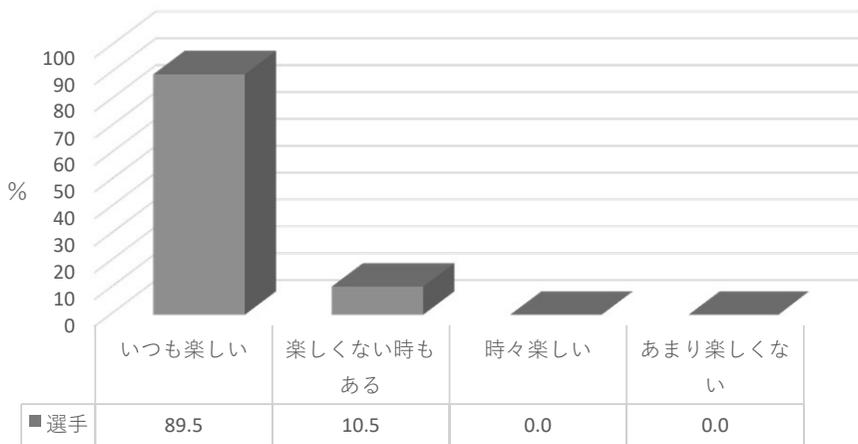


図3. 練習の楽しさ

3. 4. サッカーにおける目標

目標に関する結果を図4に示した。

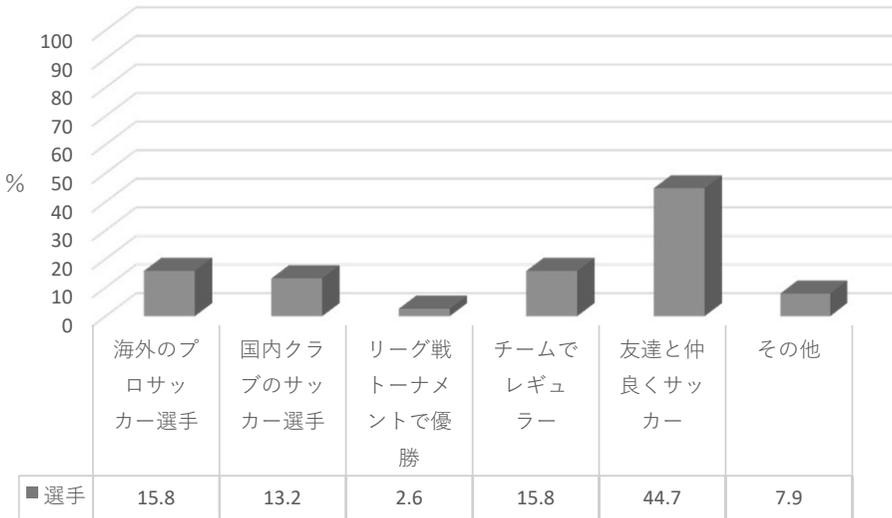


図4. サッカーにおける目標

3. 5. サッカーの観戦

観戦に関する結果を図5に示した。

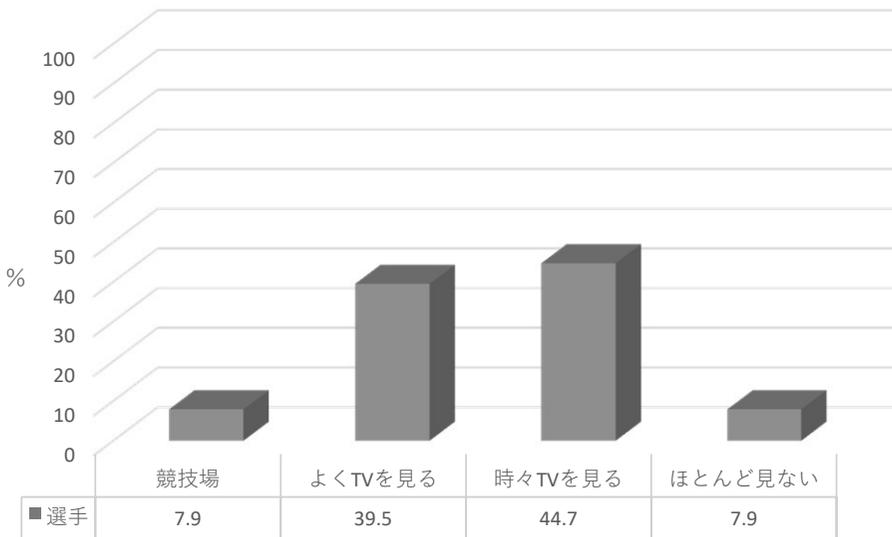


図5. サッカーの観戦

3. 6. 練習回数

練習回数に関する結果を図6に示した。

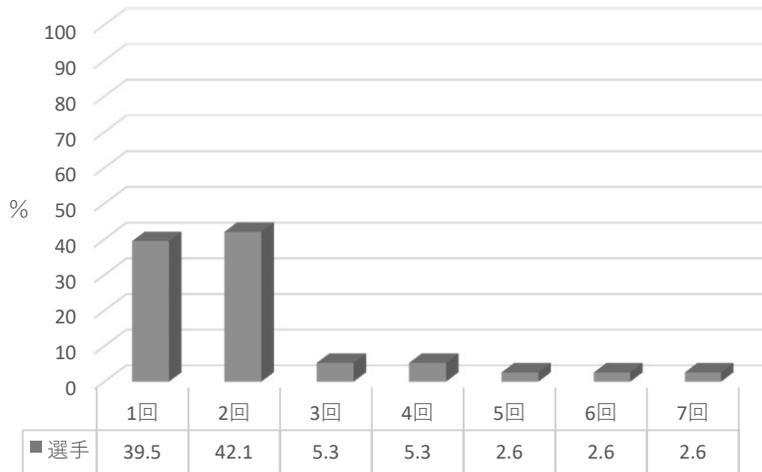


図6. 練習回数

3. 7. 練習時間

時間に関する結果を図7に示した。

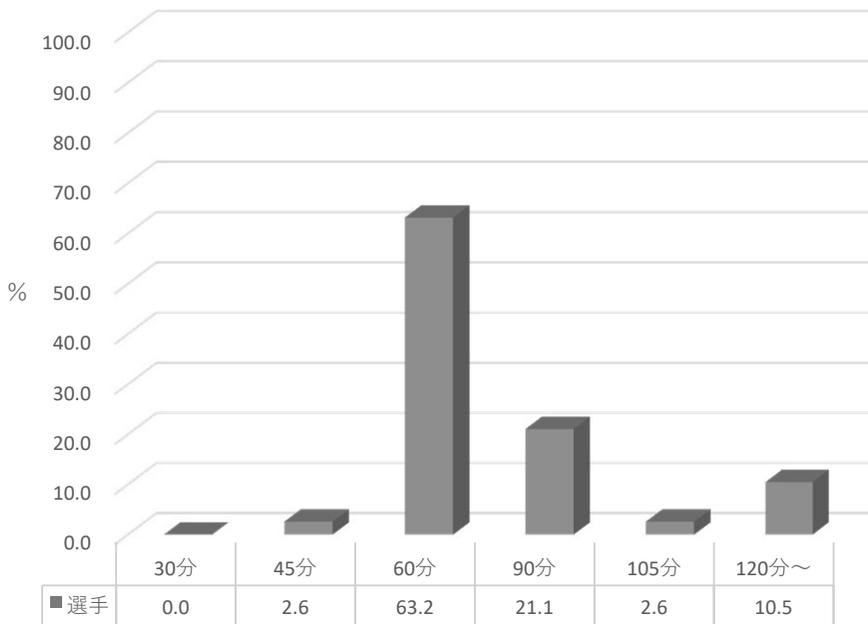


図7. 練習時間

4. 考察

松山ら（2017）の項目尺度を基に各項目での「いつもよく」「よく」や50%以上の数値を「肯定派」と定義した。各項目での「時々」「あまり」や50%に満たない数値を「否定派」として定義し、それぞれの項目の考察を行った。

4. 1. サッカーを始めた動機

サッカーを始めた動機に関しては、73.0%以上が「楽しそう」だからという内発的動機付けによってサッカーを始めたと考えられる。ベトナム統計局の報告によると、日常的にスポーツに参加している人数は人口の27.2%であり、家族がスポーツに参加している割合は18.6%である。国民全体が、スポーツに理解があると考えられ、体育は全学校数の95%が実施している。また、2008年に行われたユニセフの調査では、71%の子ども達がスポーツに関わっており、これらは都市部が農村部よりも高い割合を示す傾向にあったことが報告されている（独立行政法人日本スポーツ振興センター、2017）。例えば、男子は女子と比較して映画・コンサート・スポーツに参加する割合が高い（男子 77.4%、女子 44.2%）。例えば、普段行っているスポーツとしてホーチミン市ではウォーキングが最も良く行われており、続いてサッカーが人気である。ベトナムでは、スポーツに日常的に参加する率が高い。また、子供に至っては、71%に及ぶ体育の授業の実施率である。特に男子は、男子77.4%と非常に高い参加率を示している（独立行政法人日本スポーツ振興センター、2017）。このことから、サッカーを始めた動機に関しては、大半の育成男子選手が「楽しそう」だからという内発動機付けによってサッカーを始めるのは、ごく自然であると考えられる。

4. 2. チーム以外での練習回数

チーム以外での練習回数に関しては、81.0%以上が「ほとんどしていない」ことがわかった。また、続く13.2%が「ときどき」と回答していた。現在、ベトナムのサッカーの発展の戦略及び2030ビジョンでは、①地域及び学校におけるサッカーの促進、②新規トレーニングセンターの整備やサッカーに必要なインフラ（学校・地域におけるミニ・サッカーグラウンド、大型公的トレーニングセンター等）の整備を行動計画として実施している。しかしながら、ベトナムのスポーツ政策にはまだ課題がある。例えば、生涯スポーツ分野は強く発展してきたが、全国レベルでは、山岳地帯、国境地帯、島嶼部等、設備や管理体制が脆弱な地域もあり、全国的にしっかりとした体制でスポーツが行われているわけではない。さらには、能力のある人々を惹きつける政策が不十分であり、選手、コーチ、審判等、スポーツ分野での人材不足がおきている（独立行政法人日本スポーツ振興センター、2014）。井上氏も「ベトナムにはプロとして指導できるコーチが少なく、教育環境が不十分です。将来有望な選手が多いだけにもったいないですね。だから

こそ、少しでもベトナムの子どもたちがスポーツに対して夢が持てる環境を私が伝え、提供したいと思っています」と述べている（ベトナムスケッチ、online）。このことから、ベトナムのサッカーの発展の戦略及び2030ビジョンを掲げているものの、まだ時間がかかると考えられる。

4. 3. 練習の楽しさ

練習の楽しさに関しては、89.0%以上が「いつも楽しい」と回答している。また、続く10.5%が「楽しくない時もある」と回答していた。井上氏によると、同スクールは、教育方針として、規律ある集団行動や個性を伸ばす「スポーツを通じての人間教育」を掲げたところ、子どもに日本式の教育を受けさせたいというベトナム人や日本人が多く訪れたほどである（ベトナムスケッチ、online）。このことからスポーツを通して、何かを達成した自己効力感、自信を得ることへの楽しさにつながっていると考えられる。

また、ベトナムのサッカー事情として、街中のいたるところにミニサッカー場が点在するベトナムにおいて、もはやサッカーは国技と言っても過言ではない。プロリーグや代表チームの競技レベルはさておくとして、サッカーの競技人口に限って言えば、他に競合する人気スポーツもないため、正式な統計こそないが、ベトナムのサッカー競技人口は、日本を上回るとみられている（ハノイに新たな日系サッカースクールが開校！講師は年代別の元日本代表選手、online）。ベトナム人にとって、サッカーは、日本人以上に、親しくスポーツとして「楽しんで実施している」と実感していると考えられる。

4. 4. サッカーにおける目標

サッカーにおける目標に関しては、上のレベルを目指したいという競技スポーツとしての選手と楽しくスポーツを実施したい生涯スポーツとしての選手で2分した回答になった。「友達と仲良くしたい」は、44.7%であり、続く「海外のプロサッカー選手になりたい」「チームでレギュラーになりたい」については、それぞれ15.8%となった。井上氏が指導するスクールでは、「サッカーを通じての人間教育」「運動能力の向上」「チャレンジする心」「サッカースキル」をベースに指導を行っており、子どもの教育と共に、プロ輩出クラブとしての成長も目指している。（ベトナム総合情報サイトVIETJO、online）。このことから、競技スポーツとしての選手と楽しくスポーツを実施したい生涯スポーツとしての選手で2極化した回答になったと考えられる。

4. 5. サッカーの観戦

サッカーの観戦に関しては、44.7%が「時々TVを観戦する」、39.5%が「よくTVを観戦する」を合計すると84.2%がサッカー観戦をTVで行っているほど関心度が高いことが分かった。しかしながら、「競技場に行く」は、僅か7.9%に留まった。サッカー・ベトナム代表戦は、日本では信じられないくらいの視聴率を記録する。例えば2018年のU-23アジア選手権の決勝戦で

は77%の視聴率を記録したと言われている。これは、どの番組の視聴率よりも高い数字である (Jellyfish Agent, online)。また、日本と比較をしてみても、女性や高齢者もよくサッカーをみているというイメージがある。本当に多くの人々がサッカーを視聴しているため、テレビを観ていなくても重要なサッカー試合だと歓声でいつゴールが決まったのかわかるほどである。実際のスタジアム入場に関しては、チケット購入が難しく、サッカー・ベトナム代表戦のパブリックビューイングでは応援するために集まった人たちが溢れ返っている。ベトナムでは、サッカー代表チームが主要大会で準決勝や決勝に進出すると会社を休みにすることや社内で試合観戦など、サッカー人気が凄まじい。このことから、ベトナム人のほとんどが、スタジアムに入場できないため、サッカー観戦をTVで行っていると考えられる (ASEANマーケティング, online)。

4. 6. 練習回数

練習回数に関しては、「42.1%」が2回、「39.5%」が1回が多く、平均2.1回であった。

今回参加した選手は平均8.8歳 (5～15歳) であり、JFAの指導指針の～10歳時 (週練習2回とゲーム1回程度) の比較を行っても、大きな差は見られなかった (JFA, 2017)。このことから、JFAの指導指針に沿った練習回数をこなしていると考えられる。

4. 7. 練習時間

練習時間に関しては、「63.2%」が60分、「21.1%」が90分で多く、平均73.9分であった。

今回参加した選手は平均8.8歳 (5～15歳) であり、JFA指導指針の10歳以下 (週7回300分以内、1回練習平均60分程度) の比較を行っても、大きな差は見られなかった (JFA, 2017)。このことから、当該クラブで指導している日本サッカーに精通した指導者が上手く練習時間を調整してJFA指導指針に沿った練習時間をこなしていると考えられる。

以上のことから、ベトナムサッカークラブの育成年代選手は、サッカーに対する興味があり、志向や目標などが明確であった。今後、スポーツ開発計画のみならず日本人サッカー指導者が設立したクラブなどによって、ベトナムサッカーが世界の強豪へと発展していくと考えられる。

5. まとめ

本研究では、ベトナムサッカーに寄与した日本人サッカー指導者によって、設立されたクラブの育成年代サッカー選手が、サッカーに対する志向や目標などを探索する基礎的研究を実施することが目的である。その結果、以下の内容が明らかになった。

5. 1. サッカーを始めた動機

サッカーを始めた動機に関しては、73.0%以上が「楽しそう」だからという内発的動機付けに

よってサッカーを始めたと考えられる。このことから、ベトナムでは、スポーツに日常的に参加する率が高い。また、子供に至っては、71%に及ぶ体育の授業の実施率である。特に男子は、男子77.4%と非常に高い参加率を示しているため、内発的動機付けによってサッカーを始めるのは、ごく自然であると考えられる。

5. 2. チーム以外での練習回数

チーム以外での練習回数に関しては、81.0%以上が「ほとんどしていない」ことがわかった。また、続く13.2%が「ときどき」と回答していた。このことから、ベトナムのサッカーの発展の戦略及び2030ビジョンを掲げているものの、スポーツ政策にはまだ課題があるため、まだ時間がかかると考えられる。

5. 3. 練習の楽しさ

練習の楽しさに関しては、89.0%以上が「いつも楽しい」と回答している。また、続く10.5%が「楽しくない時もある」と回答していた。ベトナムのサッカー事情として、街中のいたるところにミニサッカー場が点在するベトナムにおいて、もはやサッカーは国技と言っても過言ではない。このことから、ベトナム人は、日本人以上に、親しくスポーツとして「楽しんで実施している」と実感していることがわかった。

5. 4. サッカーにおける目標

サッカーでの目標に関しては、上のレベルを目指したいという競技スポーツとしての選手と楽しくスポーツを実施したい生涯スポーツとしての選手で2分した回答になった。「友達と仲良くしたい」は、44.7%であり、続く「海外のプロサッカー選手になりたい」「チームでレギュラーになりたい」については、15.8%となった。このことから、ベトナム人にとって、サッカーを競技スポーツとしての選手と楽しくスポーツを実施したい生涯スポーツとしての選手で2分した考えがあるとわかった。

5. 5. サッカーの観戦

サッカーの観戦に関しては、44.7%が「時々TVを観戦する」、39.5%が「よくTVを観戦する」を合計すると84.2%がサッカー観戦をTVで行っているほど関心度が高いことが分かった。しかしながら、「競技場に行く」は、僅か7.9%に留まった。このことから、ベトナム人のほとんどが、実際のスタジアム入場では、チケット購入が難しく、スタジアムに入場できないため、サッカー観戦をTVで行っていることがわかった。

5. 6. 練習回数

練習回数に関しては、「42.1%」が2回、「39.5%」が1回と多く、平均2.1回であった。今回参加した選手は平均8.8歳（5～15歳）であり、JFAの指導指針の～10歳時（週練習2回とゲーム1回程度）の比較を行っても、大きな差は見られなかった。このことから、JFAの指導指針に沿った練習回数をこなしていることがわかった。

5. 7. 練習時間

時間に関しては、「63.2%」が60分、「21.1%」が90分と多く、平均73.9分であった。今回参加した選手は平均8.8歳（5～15歳）であり、JFA指導指針の10歳以下（週7回300分以内、1回練習平均60分程度）の比較を行っても、大きな差は見られなかった。このことから、指導している指導者が上手く練習時間を調整してJFA指導指針に沿った練習時間をこなしていることがわかった。

以上のことから、ベトナムサッカークラブの育成年代選手は、サッカーに対する興味があり、志向や目標などが明確であった。今後、スポーツ開発計画のみならず日本人サッカー指導者が設立したクラブなどによって、ベトナムサッカーが発展していくと考えられる。

引用参考文献

ASEANマーケティング

<https://www.clisk.com/column/asean-marketing/11629.html>（2020年6月2日参照）

Golaco [ゴラッソ] 大人のサッカーまとめ

<https://www.golaco.club/articles/4709>（2020年5月28日参照）

独立行政法人日本スポーツ振興センター（2017）平成29年度調査報告書ASEAN地域におけるスポーツニーズ調査研究フェーズ。日本スポーツ協会，pp.96-107.

独立行政法人日本スポーツ振興センター（2014）平成26年度調査報告書 ASEAN地域におけるスポーツニーズ調査研究フェーズ1。日本スポーツ協会，pp.188-207.

JFA（2017）サッカー指導教本2017。アサヒビジネス㈱，pp.40-41.

海外就職のBEYOND THE BORDER

<https://kaigaisyusyoku.com/?p=10510>（2020年5月28日参照）

ベトナム総合情報サイトVIETJO

<https://www.viet-jo.com/news/sport/191231132545.html>（2020年5月28日参照）

ベトナムスケッチ

<https://www.vietnam-sketch.com/20180905101678>（2020年6月2日参照）

ハノイに新たな日系サッカースクールが開校！講師は年代別の元日本代表選手

<http://e-asean.net/6235>（2020年6月2日参照）

Jellyfish Agent

<https://jellyfishhr.jp/>（2020年6月2日参照）

松山博明，関口潔，須田芳正，中村泰介，土屋裕陸（2017）海外派遣サッカー指導におけるコーチング環境の実態調査－指導者の赴任動機から－。大阪成蹊大学紀要，Vol.1，No.3，101-107.

松山博明，松竹貴大（2020）ブータンサッカーの育成年代の競技力向上に関する実態調査－ポストゴールデンエイジとゴールデンエイジに着目して－。ブータン学会，Vol.3，13-24.